

言語不通の突破口を求めて

——つかこうへいの教材化——

有 元 秀 文

校庭で日課のトレーニングをやっていると、ごみを捨てに行く女生徒が二人通りかかる。

「世代が違うのね」

「毎日だものね」

そんな言葉が耳に入って、僕は全部を了解したと思った。どうしようもない壁があるのだ。男が強くなければならないのは、僕には自明の事だ。運動部の顧問をやっていれば、体力でも筋力でも遅れを取りたくない。これも自明の事だ。しかし生徒は「なぜ」と思う。

若いつもりでいたのに、自分の言葉の一つ一つが通じない事を授業のたびに思い知らされている。言語不通ということばは、我々の世代に向けられたものであろう。しかし、今日の事態は、はるかに深刻なのである。言語不通などと言わな

くなったのは、事態が日常化したからに他ならない。

授業態度が悪化しているのは国語に限ったことではないようだ。しかし生徒の方にも、「面白くない」という強力な主張がある。

それに対する「勉強つてのは、辛抱するものだ」とか、「漫才じゃあるまいし、年がら年中面白おかしくやってられるか」という論理はどこまで妥当であろうか。

事実としてそんな論理が通用しないから、学校は混乱しているのである。

混乱を究明するために、まず学校制度から考えてみたい。

今や、わが早稲田大学が学問をするための大学であるという認識は一般的ではない。しかし大隈の意図は「学の独立」にあった。その意味は、遠い明治とともに忘れられている。大

限の時代は、国の独立が危い時代だったのである。彼は学の独立によって国の独立をはからんとした。

僕が問題にしたいのは早稲田のことではない。問題は、国の存立が危いから勉強した時代と大差ない学校制度を続けていることの矛盾である。一日六時間、休みなく授業がある。

教師は一方的に話す。生徒は一方的に聞く。批判は許されない。列強の餌食になっても何の不思議もない時代、富国強兵が命がけの急務であった時代と同じ制度が、世界一経済の安定したこの国に、なぜ存続できるのか。また、この制度は、大あわてで西洋の技術を習得して大砲を作ったり、軍艦を作ったりするのは有効かもしれない。働き蟻のようなサラリーマンを量産するには有効かも知れない。

しかし、創造力や思考力や個性を育てるのに有効な制度だとだれが言えるのか。

次に国語教育について考える。生徒が漫画を読みふけている姿は、誰も目にした事がある。仮に本を読む生徒がいても、愛読書の過半は、SFか推理小説である事も誰も知っていることであろう。この状況から簡単に帰結できることは、こういう生徒が国語教科書の文学や評論を面白いと思うことなど有り得ないと言うことである。古文も漢文も漢詩も楽しんで読むことができ、ヨーロッパの文学に熱中した体験があつてはじめて、漱石も谷崎も面白いのである。漫画とテレビにしか熱中しない生徒に「心」や「舞姫」がわからないのは当然だし、「山椒魚」だって、わかりっこないのである。

膨大な知識を前提とするものを、全くそれらの知識の持ち合わせのない生徒にいきなり与える無理を我々はしているのである。無理だからあきらめようと言うのではない。突破口を作るべきだと思うのである。

我々にとって自明なことは生徒にとって自明なことではない。我々に面白いことは生徒に面白いことではない。全く異質の信念体系、全く異質の知識体系の持ち主である世代間に確かに有る壁を認識し、切り込むべき突破口をさぐるべきである。

さぐるということは、何度でも仮説を立て直すという事である。教科書を教えていて反応の悪さにいら立ちながら、痛感した事は、教材が古すぎるといふ事である。二十歳も年の違わない僕の言う事が往々通じないのに、五十年も六十年も昔の教材が通ずるわけではない。しかし我々は「現代」国語を教えているのである。そこでつかこうへいの二つのエッセイを教材化してみた。二篇の出版は、「傷つくことだけ上手になつて」(角川文庫昭和五十七年初版)である。

一、愛がいっぱいの時代のなかで

冒頭は次の通り。

「親という動物は、夢を語ることをせず、自分が経験してきた恐怖を通してしか、子に物を言わないものなのです。自分たちの失敗を繰り返させまいと、すこしばかり成功した型を押しつけてきます。イヤなことの反対が幸せだと思い、親の成功は、子の成功にもあてはまると信じたのです。早い

話、朝起きる時間から、夜、床につく時間まで自分たちのペー
ースを最良と思い込みがちで、早起きの親と同居する低血圧
の子供は悲惨の極みです。遺伝でなくても低血圧の子は生ま
れるのです。

低血圧の子にとって早起きの親の意見は無理難題に近い。

苦もなく起きる親が早起きの死ぬほどつらい子を理解しない
で説教すれば押し付けである。この種の無理解と押し付けの
どこに「夢」があるのかというのが、つかの主張である。「勉
強しろ」という親はいても立派な人間になれという親はいない
のではないか」という新聞の投書を読んだ。今はそういう時
代なのである。

「いつでも夢を」などという歌に夢中になった時代には、
教師も「無限の可能性を信じろ」とか、「希望を持て」とかさ
かに教えたことを記憶している。今は顔を赤らめずにそん
な事を言う人間はいない。一行目の「親という動物は『夢』
を語ることをせず。」というつかの言葉は、そんな背景に根ざ
したものであることが、同年代の僕には良くわかる。

ここで僕が考えさせようとした事は「夢」という一語であ
る。これは古い世代の郷愁として済ませる問題ではない。人
間普遍の問題だからである。この一語を考えさせるためには、
わずかの間に急転した時代と、「夢を奪われている」現代のす
べてとを考えさせねばならない。希望は万人のもののだが、夢
や希望を忘れた若者などあってはならない。

「夢」をめぐるデイスカッションの成果は、はずかしなが

ら僕の想像を絶するものであった。全部の生徒が、どうせ当
り前に平々凡々と生きて行くに決まっているのだからと信じて
いるのであった。自分には信じられなかった。

この考え方の根は深い。「当り前に生きて行くに決まってい
る」夢などあり得ない。だから「夢」という一語は通じ合わ
ない。しかしこの一語を通じさせる努力を断念することはで
きないのである。

つかの論は次の様に展開する。

「いまは、愛が一杯の時代で、誰もが愛されることに慣れ
過ぎています。何でも、愛されることを前提に、物事を考え
組み立てていきます。愛だって、きつと石油なみに限りのあ
るもので、愛のムダづかいを戒めるべきですし、愛せば何で
も肯定されるつもんじゃないでしょう。」

今は充たされ、ハングリーであり続けることが難しい時代
です。何が欠けているのか漠然としすぎていて、何を求めて
いるのか具体的になかなか見当がつかず、飢えるという感覚
が物珍しいのです。

きつと、この時代を生き抜くためには、一番やさしい人、
愛してくれる人を意識的に遠ざけ、裏切っていく必要がある
のではないかと思います。やさしさに食傷気味の人は、裏切
ることによって精神的高揚が得られるでしょう。

たとえば、親という動物に悪気があるなら子はそれを批難
し、世に理不尽さを訴え、思いっきり反抗できるのでありま
すが、いかにせん良織ある親が多すぎます。

だから、若者は、そのやさしさ地獄、泥沼のやさしさを振り切る勇気を持たねばならないのです。」

ここでのキーワードは「愛」と「やさしさ」の二つである。「愛」ということばは、「愛のムダづかい」と否定的に扱われ、次に「愛」は「やさしさ」に置きかえられるが、「やさしさ地獄、泥沼のやさしさ」と形容されることに作者の意図がある。安易に表面的に受けとれば親不孝のすすめのようだが、そうでないことは、すぐあとの文の行間からわかる。

つかが、ハングリーと言っているのは、まぎれもなく生きがいのことである。やさしさも愛も、生きがいや希望につながるものでなくてはならない。夢につながる愛などあり得ないということである。

ここで、「夢」というキーワードと、「愛、やさしさ」というキーワードは、有機的に結びつくのである。

つまり僕の提案する方法論は、キーワードの意味の理解が第一であり、第二は、キーワードの有機的なつながりを理解することである。

つかが、「愛」と「やさしさ」を醜惡に形容したのは、つかの了解している「愛、やさしさ」の意味が現代のそれと違うということの主張である。

このあと、つかの父親について、「親父は死ぬまで私のことを恥じていました。」として、にもかかわらず自分の道を進んだ体験を語ったあと次のようにこのエッセイを結んでいる。

「このご時勢、昔みたいに、手に職がなくても飢え死にする

ことはありません。家出した者が人買いに売られたり、かけおちをしたばかりに食いつめるということもありません。そのつもりになれば、一生喫茶店のアルバイトで充分喰っていけます。喰いっぱぐれることがないのであったら、『決して、飢え死にすることはない』と逆手にとつて、冒険してみるのもいいし、大胆に職業を選択していけばいいと思います。(中略)

人は、やさしさに慣れ過ぎ甘えることが当然だと勘違いしています。やさしさだの、あたたかさだのも度が過ぎれば有害です。しめきつた部屋で長時間、練炭をたけば中毒をおこします。ときには窓をあけ、空気の入替えが必要です。裏切りも、やさしさに窒息しないための一つの方法です。親を裏切り、すべへを裏切り、律儀さなんてほったらかして、冗談で進路を決めてみるのも、オツなものですよ。

私なんか、まじめでやさしいもんだから、二十五で若手で三十二になつたいまも若手で、きつと四十すぎまで若手をやらされるでしょう。親なんて、若いモンを心配したふりをして活力をたくわえていくのです。

昔とちがつて、いまは民主主義の時代です。四度や五度のやりなおしはきくものです。」

この「四度や五度のやりなおしはきくものです」という言葉に共鳴した生徒は多かった。

しかし共鳴したところで、引用を省略した部分にあった「大きな望みではなく、ちつとばかりの、楽な生活を望んでいるか

ら、世の大人どもからは覇気がないと言われるのであります。』
という言葉の意味は容易には理解できまい。それは冒頭の「今は充たされ、ハングリーであり続けることが難しい時代です」という考えを前提にしているからである。

つかの大家とは、ハングリーであり続けなければ獲得できないものなのである。しかし今の若者のどこにハングリーが実在するであろうか。そしてこの「ハングリー」という一語が生徒には全く通じないことも思い知らされた。ハングリーで無いのだからあたり前なのである。

結局この一篇は、若者の夢について語ったものである。その夢の達成の為には、ぬるま湯的やさしさ地獄をふり切る勇氣とハングリーであり続けることの必要性を説いている。

実際のところ、国立大学を受験して共通一次で苦しむのは見ておれないから、私立大学を受けてくれと親が頼む時代である。そんな親に限って早稲田がどんなに難しくなったか知りはない。つかの洞察が誇張ではないことは、国立も私立も入れないとき容易に立証される。だが、ハングリーでありたいと望む若者は少いから、結局この一篇の主張が生徒に理解されるのは難しい。「親を裏切り」という言葉に反発する生徒が非常に多かったのも、その証拠である。同時につかの洞察が正しいという証拠でもある。

二、第一私がそうだった。

第一篇に続いて、第二篇の授業を行った。

第二篇の冒頭は次の通りである。

「私も螢雪時代も高三コースもあらゆる受験雑誌を毎月とっていた。本が届くと『合格体験記』ばかりをむさばり読み、『男はやはり、一年ぐらい浪人しても長い人生においては貴重な人生経験となる』とか、『東大だけが大学といった狭い考えを捨て、大学を人間形成の場と考えることだ』などの文章を見つけては一人得心していた。

そして親には、『いやあ、やっぱり一年ぐらいは人間形成のために予備校へ行った方がいいんだって』とおおらかに言っていたら、ほんとに浪人してしまった。(中略)

私の体験からはつきり言わせてもらうが、この手の体験記はまったくの嘘である。まず大学は、有名な一流大学ほどいいのだし、なにがどうでも東大が一番なのだ。

げんに私の劇団では、劇団員を募集すると三千人からの応募があるので一人一人会ってられないため、履歴書をみてバカな大学の奴から落としていっている。芝居は頭が悪くてはやっていけない。実際私の劇団では、東大落ちて早稲田の政経へ入った者、京大落ちて早稲田の文学部へ入った者、その他慶応、早稲田の教育学部と、皆現役合格のものばかりである。私のところのようにたかだか七、八人の小さな組織でさえこうなのだから、三井や三菱などの大きくて立派な仕事をしている会社で、本気でしちめんどくさい面接試験なんかするはずがない。

だからもちろん、新聞で『学歴無用論』など論じている批評家など必ず一流大学出身者であり、万一アホな大学を出た

評論家の言うことなどを世間の人は見向きもしない。」

前のエッセイで「四度や五度のやりなおしはきくものです」と言っているが、「なにがどうしても東大が一番なのだ」と言っているのは到底同一人物のやることとは思えない。

この二篇の一見矛盾する二つの論理の連絡を考えさせることがこの授業の最終目標である。

「先日私のところへ、劇作家になりたいと男の子がやってきた。聞いてみると、高三で、虚しく受験勉強してるよりも早く劇作家になるための勉強をしたいという。『ばか！』大事も通らないような奴に劇作家になんかなれるか！』と一喝し追い返した。こんなもの受験こわさの言い逃れに決まっている。」

つかの考えの第一点は、「学歴無用論者」の嘘であり、第二点は、「学歴無用論に乗った者」の嘘である。そして、それを言わしめるものは、彼の生活である。

「私の芝居もばくちのようなもので、毎日の本番が試験の発表日と同じである。生身の人間のある仕事だから結果はすぐ表われ、客もそれにすぐ反応する。私は常日頃から、芝居の内容はともかく、批評家、新聞記者へのお中元、お歳暮のつけ届けは怠りなく、決して悪い批評のもらないようにとの周到的配慮をめぐらしていく。私の仕事の場合は、確実に「食いつぶされる」のだから日々命がけである。」

我々教員が、できの悪い授業をしたからといって食いつぶされる心配はない。しかし我々も、かく命がけであるべきで

ある。その命がけの視点で見れば、評論家の言行不一致や、受験生の甘ったれが我慢がならないというだけのことである。事実は、優勝劣敗、弱肉強食以外の何ものでもないのに、甘美な理想論が横行しているのが現代である。ある新聞社が夕刊で学歴社会を攻撃しているが同じ社の週刊紙が大学入試ランキングを載せたり、入試予想問題をのせたりしているように。

二篇は一見矛盾しているが、「ハングリーであり続ける」という一点で一貫している。

「ともかく、受験生諸君は、嘘だらけの『合格体験記』には目もくれず、素直な心で名誉欲や金銭欲というものをバネに一流大学に合格して欲しい。『本当の勝負は社会に出てからだ』などといったところで、社会はこれからだってこの学歴社会が続くのであり、変わらない方がよいのだから。

人から『どちらの大学ですか？』と尋ねられて『モゴモゴ』答え、『え？』と問い返された時『東大です』と答えられる快感を思えば、少々虚しかろうが眠かろうが、そんななんでもない。

私でも、あの時東大に受かってさえいたら、世に出るのがあと五年は早かったらうと、いまだに自分の歯きりに目がさめて飛び起さるのだ。」

これが第二篇の結びである。第一篇で、言いようのない不安感に誘われた多数の生徒は、ここまで読むと、非常に得心する。

「いい大学へ行けば、有名女子大から合ハイ、デンプァ、コンパの誘いが山ほどだ。これが名もない大学などへ行ったら、女子大なんかから相手にされなばかりか、そのためどんな人間がいじけ、目もあてられなくなりすさんでしまう。」

と言う事は事実であり、学歴が幸せの決定要因として極めて重大なことは、誰も良く知っているからである。その一方でマスコミの「受験有害論」はますます盛んである。つかの様に「学歴有用論」をだれも説かず、有害論ばかり聞かされながら受験勉強に追いやられる立場の苦しさは言うまでもない。

生徒がつかの「学歴有用論」に納得するのは、その原理が若者の日常を強力に支配しているからである。第一篇の「親を裏切つてでも自分の夢を果たせ」という主題が不安をかき立て、第二篇の「勉強さえすれば幸せになれる」という主題が安心感を与えるのは当然である。

しかし、少数の生徒は第二篇に安心しない。丁寧に読む生徒はそこにアイロニーを感じるからだ。

例えば「三井や三菱などの大きくて立派な仕事をしている会社」の「立派」に傍点がふつてあることに気が付けば、作者の言葉は文字通りには取れない。「浪人の時の苦勞など、なんの人格形成の役にも立ちほしないのだ」「浪人生活のあの一年を返せ!!」という文に気が付いた生徒は、現実を否定しながら認めざるを得ないつかの悲しみを読み取っている。

三、まとめ

つかこうへいの矛盾、分裂と一貫性を理解することは簡単ではない。しかし、つかの矛盾と分裂は僕自身のものでもある。一方で受験指導をしながら、光太郎や賢治をなぜ語ることが出来るのか。

漱石や藤村が早く予感した近代日本の矛盾は、予想以上の速度で深刻化しているように思えてならない。この二篇を読むことは、混乱し分裂した現代を認識することに他ならない。だから答えはどこにあるのだといわれても、つかには答えられない。ただ時代とともに混乱しているだけである。我々は生徒より少し多く読書しているかも知れない。ただしその知識が今日の状況に役立つなどと誰が言えるだろうか。なぜなら今起きていることは、どんな知識も適用できない全く新しい事態かも知れないからだ。

我々に出来ることは、感じ、考える訓練の場を与えることである。そして作品を理解する突破口となるものは、「愛・夢・学歴」などの「ことば」であること。つまり一語をもおろそかにしないことを教えることである。

(都立新宿高等学校)